



透明な遺書

内田康夫

とうめい いしよ
透明な遺書

うちだ やすお
内田康夫

© Yasuo Uchida 1996



講談社文庫

定価はカバーに
表示してあります

1996年3月15日第1刷発行

発行者——野間佐和子

発行所——株式会社 講談社

東京都文京区音羽2-12-21 〒112-01

電話 出版部 (03) 5395-3510

販売部 (03) 5395-3626

製作部 (03) 5395-3615

Printed in Japan

デザイン——菊地信義

製版——凸版印刷株式会社

印刷——凸版印刷株式会社

製本——株式会社若林製本工場

落丁本・乱丁本は小社書籍製作部あてにお送りください。
送料は小社負担にてお取替えます。なお、この本の内
容についてのお問い合わせは文庫出版部あてにお願いい
たします。(庫)

ISBN4-06-263185-7

本書の無断複写(コピー)は著作権法上での例外を除き、禁じられています。

透明な遺書

透明な遺書

目次

プロローグ — 9

第1章 美しい依頼人 — 34

第2章 時雨れて喜多方 — 66

第3章 浅見刑事局長の憂鬱 — 114

第4章 迷走の軌跡 — 161

第5章 黒い還流 — 216

第6章	内なる鬼	262
第7章	失踪	309
第8章	とめどなき崩壊	355
第9章	阿修羅の選択	400
第10章	地の罫、天の網	445
エピローグ		494
自作解説		499

この作品は、フィクションであり、特定の団体等モデルはありません。

透明な遺書

プロローグ

ほんの短い時間だが、眠りに落ちていたらしい。カタンと小さなショックを感じて目覚めた。西村裕一は反射的に立ち上がって、ドアの方向へ急いだ。カタンときて、二十秒足らずでY駅に着く。

しかし、立ち上がって、すぐに気付いた。窓の外の風景がいつもと違った。広びろとした河川敷が見えて、電車は鉄橋にさしかかった。足元からゴウゴウという重い金属音が伝わってきた。

西村は苦笑した。習性というのはおそろしいものだ——と思った。同じレールの上を走っているのだから、似たようなショックの個所があってもふしぎはないが、そのショックで無意識に反応し行動を起こすというのは、動物的な条件反射そのものだ。三十年もサラリー

マンをやっていると、そこまで飼い慣らされるものなのか。

座席に腰掛けると、じきに眠ってしまうのも、一種の条件反射なのかもしれない。そう思ってみると、日常生活の行動の中の、かなりの部分がそれに近いような気もしないではない。

肩を叩かれて、振り向くと藤田克夫ふじたかつおの笑った顔があった。

「同じハコだったのか。ぜんぜん気がつかなかった」

ドアに向かって並んで立った。

「通夜つやにはいなかったのか？」

西村は訊きいた。

「ああ、ちょっと取材で秋田に行っていた。昨夜遅く帰ってきて、はじめて知った」

「そうか、僕も富山へ出張だった。けさの飛行機で帰ってきて、会社に出たら佐々木ささきから連絡があった」

「なんだ、そうだったのか。ゆうべ電話しても出ないから、てっきりお通夜に行っているのかと思ったが……そうか、きみも行かなかったのか。じゃあ、清野せいののやつ、かわいいそんなことをしちゃったな」

藤田が「かわいいそう——」と言うと、実感がこもって聞こえる。感情の起伏のはげしいところや、それをストレートに表現する性質は、若いころから変わっていない。

「佐々木に聞いたけど、ただの病死じゃないんだって？」

西村は声をひそめて言った。

「いや、知らないが……そうなのか？ おれはてっきり心臓だと思ったが」

藤田は驚いた顔を、ねじ向けた。

電車は急に速度を落とした。駅の構内に入る標識が過ぎていった。

背後に乗客が迫ってくる気配を感じて、二人は会話を中断した。葬祭場の最寄り駅だけに、喪服姿の乗客が多い。葬儀はいくつも行われるのだろうけれど、彼らの中には清野家の関係者がいるかもしれない。ホームから階段を下りてゆくあいだ、二人はずっと沈黙を守った。

「ただの病死でないというと、何で死んだんだ？」

改札口を出るとすぐ、藤田は訊いた。

「詳しいことは聞かなかったが、自殺だとか言っていた」

「自殺？ ……」

藤田は足を停めた。つられて西村も立ち止まった。

「どういうことだ？」

「いや、だから、詳しいことは知らない」

西村は「行こう」と顎をしゃくって、歩きだした。藤田には言わないほうがよかったかな

———と思った。藤田は『旅と歴史』という雑誌の編集長をやっている。一応、ジャーナリストの端くれにはちがいない。まさか、友人の不幸をメシの種にするようなことはないだろうけれど、彼の好奇心を刺激するのは考えものではあった。

駅前の広場から斎場行きのマイクロバスが出ている。「清野家」という貼り紙のあるバスには、西村と藤田のほかには、見知らぬ女性が二人乗っただけで、バスは発車した。駅から斎場までは十数分もかかった。

ここは私営だそうだが、荒川土手のほとりに建つ、一見、リゾートホテルのような印象すら与える宏壮な斎場であった。駐車場も広く、マイカーやマイクロバスがずらりと並んでいる。

式場の入口脇に、「清野林太郎りんたろう殿告別式式場」と大書した、高さ三メートルあまりの大きな分厚い看板が立ててある。葬儀の雑務一切は、清野が勤めていた会社で取り仕切っているらしく、案内係も受付も、すべて会社のバッジをつけた人々が務めている。ごく私的な友人である西村や藤田は、なんとなく「お客さん」といった感じで、弔問客の列の最後尾についてた。

入口を入ると、正面にかなり豪華な祭壇が見えた。左右に弔問客がギッシリ詰まっている。すでに葬儀は始まっていて、読経の中、焼香の列はゆっくりと進んだ。

清野未亡人の房子ふさこは、丸々と太った体を喪服に包み、一人娘の翠みどりに支えられて、やっと立

っているといった様子である。参列者の一人一人に礼を返す仕種^{しぐさ}も、いかにもつらそうであった。

清野はガリガリに痩せた男だったが、房子は対照的に、病的な肥満体質で、いつも心臓を気にしていた。「先に死ぬのは私ですから、主人をよろしくお願いしますよ」などと、本気とも冗談ともつかぬことを口癖^{くちくせ}のように言っていたのが、逆になった。

清野翠は両親のいいところだけを受け継いだような、それなりに逞^{たくま}しく、それなりにスマートな、美しい顔立ちの娘だった。清野の愛情を一身に受けて育った彼女が、父親の死を悲しまないはずはないのだが、いまは涙も見せず、唇をひきしめて、健気^{けんげ}に毅然^{きぜん}とした姿で立っていた。

房子は西村と藤田の顔を見ると、無意識のようにわずかに歩み寄りかけた。翠に制止されたらしく、踏み止まったものの、堪えきれずに顔を覆って泣きだした。親しい友人の顔から、夫の在りし日のあれこれ思い出したのだろう。そういう房子を見るのは、西村にしてもたまらない。悔やみや慰めを述べる言葉も、涙に咽^{むせ}んで、自分でも聞き取れないほどであった。

型通りに葬儀は終了して、茶毘^{だび}に付す直前の「斂^{れん}の式」に参列するために、親しい者だけが柩^{ひつぎ}に従って、建物の奥の、火葬施設があるホールへ進んだ。

ホールは床も壁も大理石張りで、天井がむやみに高く、全体の雰囲気はヨーロッパの終着

駅を連想させる。正面の壁面には観音開きの鉄扉が五つ、三メートルほどの間隔を置いて並んでいる。

清野家のほかに、焼き上がりを待つ人の群れは、二組あった。三つの鉄扉の前に、祭壇が設けられ、それぞれの祭壇の上には、花で縁取られた遺影が飾ってある。

清野林太郎の柩はいちばん右端のカマドに向かつて進んだ。鉄扉が開けられ、さらにその向うにある、カマドの扉が上げられた。読経のうちに柩は二重扉の奥の暗黒に吸い込まれていった。

扉が閉まる瞬間には、清野房子は泣きじゃくり、失神するのではないか——と思えるほどに全身から力が抜けた。翠だけでは支えきれず、親戚の者らしい中年の男が必死になって抱きとめている。

式がすむと、身内の人間を残して、ほとんどの人々は三々五々、控室へ向かった。

西村と藤田は、房子や翠と悲しい想いを分かちあうように、いつまでも祭壇に向かつて佇たたずんでいた。

祭壇に飾られた額縁の中で、ポートレートふうに、いくぶん横向きに写った清野の顔が笑っている。とんがり顎と目尻の皺しわの深いのが、いかにも清野らしい、いい顔の写真であった。

隣の祭壇には中年の女性の写真が飾ってある。この組は清野家よりも少し前に式が執り行

われたのか、すでに遺族も参列者もほとんど控室に引き揚げ、時折、遅れてきた人が寂しげに焼香している。

三つめの写真は中学生ぐらいの少年で、祭壇の前には同級生と思われる制服姿の少年少女が長い列をつくっている。遺族は彼らの姿を見ると、死んだ子のことを思い出すのか、また新しい悲しみに誘われ、肩を抱き合うようにして嗚咽おえろを洩らしていた。

「清野も若いけど、あの少年と較べれば、まだ慰めようもあるね」

西村は小声で言った。

「そうかな」

藤田は悲しそうに首を振った。

「もし、清野がさつきみが言ったようなことで死んだのだとすると、奥さんや翠ちゃんをどうやって慰めればいいのか、おれには分からないけどな」

「それはそうだが、しかし、たぶん自殺は間違いだろう。翠ちゃんにでも訊いてみたらどうだ」

「冗談言うなよ。おれにはそんなこと訊けないよ。何も知らないうちならともかく、自殺かもしれないっていうのにさ。西村は平気なのか」

「いや、僕だって訊けるわけがない」

二人は期せずして未亡人のほうに視線を向けた。